

## 第30回地域医療現地研究会に参加して

### 「雲の上の町ゆすはらから生きる仕組みを考える」

～地域資源を活かした地域包括ケアシステム～

<高知県・梼原町>

前国診協地域医療・学術委員会委員／

長野県・佐久市立国保浅間総合病院技術部長兼歯科口腔外科主任医長

奥山秀樹（写真1）

#### はじめに

平成28年5月20日（金）、21日（土）の2日間にわたり、高知県梼原町において国診協・国保中央会および高知県国保地域医療推進協議会・高知県国保団体連合会主催による第30回地域医療現地研究会が開催された。今回のメインテーマは「雲の上の町ゆすはらから生きる仕組みを考える」～地域資源を活かした地域包括ケアシステム～であった。このような雲の上の地で地域包括医療・ケアの実践を学ぼうと、全国各地の国保直診・国保連合会から266名の皆さんに参加いただいた。

梼原町は高知県北西部にあり、愛媛県と県境を接する町である。日本三大カルスト台地の山々に包まれた裾野を清流四万十川がゆるやかに流れる源流の町である。高知市からも愛媛県松山市からも車で90分という位置にある。梼原町はかつて医療過疎地であったが、梼原病院と保健福祉センターが中心となり、保健・医療・福祉・介護の連携をめざし、地域包括医療・ケアを推進している。こうした地域包括医療・ケアを町の大きな戦略の一つとして掲げ、まちづくりに取り組んでいる。

今回の現地研究会は例年どおり1日目の5月20日の11時から2日目の21日午前中までの開催であった。1日目は梼原町の「ゆすはら座」で開講式が行われ、昼



写真1 筆者

食後参加者は4台のバスに分乗し、梼原町立国保梼原病院と梼原町保健福祉支援センター、社会福祉法人カルスト会、雲の上のホテルなどへ施設視察研修に向かった。1日目の17時半からは「ゆすはら夢・未来館」で地域医療交流会が開催された。2日目は同じく「ゆすはら夢・未来館」で全体討議が開催された。

#### 研修1日目－5月20日(金)

前日に多くの参加者は高知県に入った。梼原町には



写真2 梶原町総合庁舎



写真4 ゆすはら座



写真3 電話のオブジェ

宿泊施設がそれほど多くなく、参加者は高知市や須崎市、また愛媛県西予市に宿泊した。私も19日午後高知空港から高知駅へ行き、国診協地域医療学術委員の皆さんと集合し、バスに約1時間揺られ梶原町へ入った。宿泊先は「雲の上ホテルゆすはら」で、新国立競技場の設計を担当した隈研吾氏の設計によるホテルであった。その後農家民宿「いちょうの樹」へ行き、矢野梶原町長をはじめ、梶原町や高知県国保連合会の皆さんと国診協正副会長や地域医療学術委員のメンバーと庭でバーベキューを楽しんだ。私は下戸なので飲めなかったが、多くの皆さんは栗焼酎の「ダバダ」などを楽しみ、梶原町の皆さんと交流した。

翌日の20日は9時半から梶原町総合庁舎（写真2）の議会室で国診協の地域医療学術委員会があり、出席した。この役場の建物も隈研吾さんによる設計で、玄関がいきなりホールになっており、“繋がる”をテーマにした受話器のオブジェ（写真3）があった。また災害時には避難所になるとのことであった。

委員会では10月に山形県・秋田県の共同で開催される全国国保地域医療学会や、来年1月に東京で開催される地域包括医療・ケア研修のテーマや内容について協議を行った。また、来年度の現地研究会は福井県おおい町で開催される予定だが、その報告もあった。

#### 【開講式】

11時半から「ゆすはら座」という大正ロマン漂う木造芝居小屋で開講式が行われた（写真4）。始まるまで梶原町の紹介をスライドショーで見せていただいた。また梶原学園（小中一貫）の生徒たちによる「ゆすはらの歌」がBGMで流れていた。

はじめに国診協の青沼孝徳会長より開会挨拶があった。まず熊本地震で被災された方へのお見舞いの言葉があり、「わが国の医療保険制度は半世紀以上に亘って国民皆保険を堅持し、世界最高レベルの平均寿命と高い保健医療水準を達成してきたが、急速な少子高齢化の進展や経済の低迷を受け、制度を取り巻く社会情勢は厳しさを増しており、抜本的な改革が進められている。

また、平成37年度を目標に地域包括ケアシステムの構築が法律に位置づけられた。国診協は地域包括ケアシステムの担い手としての総合診療専門医制度に対応するため、梶原町立国保梶原病院はもとより、全国各地の国保直診において一貫して総合診療を担ってきた。すべての国保直診は本制度における研修施設となり、直診医師はその指導医として人材育成に取り組むことが重要である。そうした行動することが全国各地における地域包括ケアシステムの充実につながる。

こうした中、地域創生に取り組んでいる高知県梶原



写真5 青沼孝徳会長による開講式での挨拶



写真6 昼食会場の食生活改善推進協議会（エプロン会）の方々

町において、地域包括医療・ケアのさらなる推進を図るため、国保診療施設関係者が一堂に会し、「雲の上の町ゆすはらから生きる仕組みを考える～地域資源を活かした地域包括ケアシステム」をメインテーマとして施設視察、研究協議を行うことは誠に時宜を得た取り組みである。首長さんをはじめ関係される皆様方と建設的な討議が行われ、有意義な地域医療現地研究会となることを期待している」と述べた（写真5）。

次いで、国保中央会会長の岡崎誠也高知市長から挨拶があり、中山間地域のモデルとして梶原町の先進的な地域医療ケアシステムの紹介があった。その後歓迎の挨拶として、矢野富夫梶原町長が梶原町の紹介と保健医療福祉の町づくりを目指していることなどをお話していただいた。最後に来賓挨拶として厚生労働省保険局国民健康保険課の榎本健太郎課長と尾崎正直高知県知事の代理として伊藤博昭高知県健康政策部参事兼国保指導課長のお二人よりご挨拶をいただいた。

その後徒歩で「ゆすはら夢・未来館」へ移動し、昼食となった。地元の食生活改善推進協議会（エプロン会）の方々（写真6）による地元の食材による郷土料理をはじめ、手作りの料理をバイキング形式でいただいた。その後参加者は4台のバスに分乗し、町内の医療介護福祉施設の視察研修に向かった。私たちのバスの中では坂本龍馬に扮した男性（写真7）が梶原町や坂本龍馬のことなどをいろいろとお話をしていただいた。



写真7 バスガイドで坂本龍馬に扮した方

#### [施設視察研修]

##### ○カルスト会

まず、私たちのバスは社会福祉法人カルスト会の障害者支援施設「梶原みどりの家」（写真8）と特別養護老人ホーム「梶原ふじの家」（写真9）を視察した。障害者支援施設「梶原みどりの家」は昭和57年に事業開始となり、現在入所者80名で職員は57名であった。廊下や部屋が広く、利用者がゆっくりと生活している様子をうかがうことができた。ここではノーリフトという考え方で、職員の身体的負担を少なくしている取り組みがあり、また、入所者の自治会があり、売店も運営していた。こうした施設では口腔疾患の対応が大変になることが多いが、指定管理者制度となっている町



写真8 橋原みどりの家



写真11 雲の上プール



写真9 橋原ふじの家



写真10 アトリエギャラリー

の国保栲原歯科診療所の橋先生に定期的に健診や口腔ケアを実施していただいているとのことだった。また、必要に応じ歯科診療所で治療をしていただいているようであった。

その後、隣の特別養護老人ホーム「栲原ふじの家」を視察した。平成3年に事業開始し現在80名が入所しており、職員数は51名であった。こちらも国保栲原歯

科診療所の橋先生が歯科健診を行っていたり、栲原病院のリハビリスタッフによる訓練が実施されていた。経口栄養の方が多く、TPNとPEGがそれぞれ1人ずつのことであった。

#### ○町内施設・史跡などの見学

続いてバスは私たちが昨夜宿泊した雲の上ホテルに行き、温泉施設との間の隈研吾さん設計のアトリエギャラリー(写真10)や地熱を利用した雲の上プール(写真11)という温水プールを見学した。その後バスは三島神社へ行き、参拝後龍馬脱藩の道を見学した(写真12)。ついで維新の門という坂本龍馬をはじめとする栲原ゆかりの志士8人の群像(写真13)を見学し、そこで集合写真を撮影した(写真14)。その後、徒歩で栲原病院・栲原町保健福祉支援センターに向かった。

#### ○栲原町立国保栲原病院・栲原町保健福祉支援センター

2つの施設は同じ建物の中にあり、しかも入り口が一緒であった。まず、池田幹彦栲原町立国保栲原病院長より栲原町の保健・医療・福祉・介護とその中心的な存在である栲原病院についてスライドを使って紹介していただいた(写真15)。

栲原町は昭和45年に無医地区となり、その後医師確保に大変苦勞したとのことであった。昭和57年に自治医大卒の医師が着任した。その後、保健・医療・福祉・介護の統合を図ることを目的に、平成7～8年に栲原町保健福祉支援センターと栲原町立国保栲原病院が新たに完成した。病院は町長と常に顔の見える連携



写真12 龍馬脱藩の道



写真15 池田幹彦院長の説明



写真13 梶原ゆかりの志士8人の群像



写真16 梶原町保健福祉支援センター



写真14 集合写真

を行い、地域包括ケアシステムの実現を図っている。1.5次までの救急医療を確保し、2次医療以上は近隣の都市部にある病院へ救急車やドクターヘリで搬送して

いるとのことであった。また、退院後は在宅や介護保険施設へスムーズに移行できるようにしている。こうした活動により「梶原病院でよかった」いわれるような病院づくりをしているとのことであった。

その後、保健福祉支援センターを視察した(写真16)。1階が地域包括支援センターと居宅介護支援事業所、2階は高齢者生活福祉センターがあり、そこには高齢者生活ハウスがあった。介護保険施設に入るほどでないが、在宅での生活が困難な方が生活している施設である。3階には社会福祉協議会があった。次に同じ建物にある隣の梶原町立国保梶原病院を視察見学した(写真17)。梶原病院は一般病床30床で内科・整形外科・眼科・小児科の標榜であるが、内科以外は他院からの派遣である。医師は4人で看護師が22人、技師6人の体制である。CTやエコー、内視鏡などの医療機器が備わっており、梶原町の1.5次医療を担っている。

梶原病院と保健福祉センターを視察した後、徒歩で



写真17 梶原町立国保梶原病院



写真19 まろうど館視察



写真18 ロビーでの「太郎さん物語完結編」



写真20 地域医療交流会での津野山神楽

総合庁舎に戻った。ロビーでは大型TVで「太郎さん物語完結編」を見せていただいた（写真18）。これは脳卒中で倒れた太郎さんが介護生活を送り、その後穏やかに天国に旅立っていくお話で、これまで3部作が上演され、今回見せていただいたのは第4部で、天国に旅だった太郎さんが、地上の家族の様子を見るという内容で、残された妻の花子さんががんになっていたが、それも受けて入れていく様子が上演された。

人は誰も生まれたからには病を得て死を受容しなければならないこと、“死”をタブー視しないことをお芝居で伝えていくという取り組みで、病院や町の職員そして住民の手作りのお芝居であった。これらの4回のお芝居も芝居小屋「ゆすはら座」で行われた。私は梶原病院の前院長の内田先生の隣で見せていただいたが、大変素晴らし取り組みで感激したことをお伝えした。同じ時間帯で、まろうど館という施設において「梶原千百年物語り」というテーマで、梶原の歴史を見

学する参加者も多くいた（写真19）。

#### 【地域医療交流会】

現地研究会1日目の夜は恒例の交流会が開催され、250名が参加した。開会に先立ち、地元保存会による「津野山神楽」が披露された（写真20）。はじめに国診協今井正信相談役顧問より開会挨拶があり、本日の施設視察や明日の全体集会のこと、そして、直診が地域包括ケアのフロントランナーとして牽引するため、各地域の方々と交流してほしいと挨拶された（写真21）。

次に高知県国保地域医療推進協議会会長の今西芳彦本山町長より歓迎の挨拶があり、高知県国保地域医療推進協議会副会長の松浦喜美夫いの町立国保仁淀病院院長の音頭で乾杯となり、交流会が始まった。高知の美味しい魚などに舌鼓を打ちながら、地域医療などについて参加者同士語り合った（写真22）。またアトラクシ



写真21 今井正信相談役顧問による交流会開会挨拶



写真23 アトラクション「よさこい鳴子踊り」



写真22 地域医療交流会の様子

ョンとして、例年よさこい祭りに参加しているチーム「梶原」が「よさこい鳴子踊り」という元気なパフォーマンスを披露していただいた（写真23）。

最後に高知県国保地域医療推進協議会医師部会長の佐野正幸本山町国保嶺北中央病院院長より閉会の挨拶をいただき、閉会となった。参加者はそれぞれの宿泊先に帰って行き、それぞれ二次会に参加したようだ。

## 研修 2 日目 - 5月21日(土)

### [全体討議]

2日目は「ゆすはら夢・未来館」で午前9時より「雲の上の町ゆすはらから生きる仕組みを考える～地域資源を活かした地域包括ケアシステム～」というテーマで全体討議が行われた（写真24）。開会に先立ち、10月に開催される山形県・秋田県共同開催

の第56回国保地域医療学会の学会長である、阿部吉弘山形県小国町立病院院長より学会の案内があった（写真25）。全体討議の座長は昨夜の交流会で最後に閉会の挨拶をしていただいた佐野正幸本山町国保嶺北中央病院院長が務め（写真26）、矢野富夫梶原町長（写真27）と池田幹彦梶原病院院長（写真28）と内田望前梶原病院院長（現・埼玉県国保町立小鹿野中央病院地域包括医療部長 写真29）の3名から報告があった。

矢野富夫梶原町長からは梶原町の紹介があった。梶原町は6地区56集落からなり、人口3,690人高齢化率42.4%、91%が森林とのことであった。矢野町長はすべての住宅に意見を聞き、町のビジョンをつくった。そして6つの柱の一つに「保健・医療・福祉・介護の充実したまち・地域包括ケアシステムの充実」を掲げて、人口減少に立ち向かってスタートした。

さらに6地区の集落活動センター単位で実施することと、町内全域単位で実施することを決めた。集落活動センターでは、中山間地区では死活問題であるガソリンスタンドの経営や住民の輸送手段として有償大型タクシー事業、配食サービスなど、さまざまな事業を展開している。町内全域単位としては「道の駅ゆすはら」の整備・梶原病院の整備・健康文化の里づくり推進員の育成などを実施した。

こうした活動を通じ、特定健診受診率は平成24年度には全国トップクラスの75.3%になり、高知県では1位である。福祉の町づくりでは、やはりこれも建築家隈研吾氏設計による複合中間施設を計画中である。ま



写真24 全体討議の様子



写真27 全体討議での矢野富夫栲原町長



写真25 阿部吉弘山形県小国町立病院院長による地域医療学会の案内



写真28 池田幹彦栲原病院院長



写真26 全体討議座長の佐野正幸本山町国保嶺北中央病院院長



写真29 内田望栲原病院前院長

た、低炭素なまちづくりをして再生可能エネルギー自給率を現在の30%から100%を目指すということであった。Iターンのため住宅をつくったり、雇用の場をつくったりした。こうしたことを通じ人口減少に歯止めがかかったとのことであった。

今年の4月に就任した池田幹彦栲原病院院長からは「栲原町から生きる仕組みを考える」と題し報告があった。栲原病院の役割として「①地域包括ケア体制の充実、②かかりつけ医と保健・介護予防活動との協働、③救急医療の確保、④災害救護病院、⑤地域医療の教育の場」という5つの柱を立てた。「住

民の命を守ること」を共通の目標（目指す山頂）として、町長と病院長の連携、医療・介護スタッフとの連携を確立した。また、住民と病院との絆を図るため、各地域へ出向いて「座談会」を開催し、「梶原病院でよかった」といわれる病院にした。具体的な改善点としては、病院職員の名札の字を大きくしたり、待合室の椅子をきれいにしたり向きを変えたりした。

「病院と町民をつなぐ会」という講演会を開催し、地域医療や看取り・人生の最期などについて全国からさまざまな講師を招聘した。また、20戸に1人の「健康文化の里づくり推進員」を育て、各戸を訪問し予防活動を進めた、その結果、特定健診受診率が70%を超え、後期高齢者1人あたりの医療費が高知県平均と比較し毎年20万円抑制できた。重症救急患者はドクターヘリで搬送するシステムの紹介もあった。また、研修医や医学生の受け入れも多く、地域医療の研修を実施している。

続いて内田望前院長からは地域包括医療・ケアについてのお話があった。国診協常任顧問の山口昇先生が提唱している地域包括医療・ケアの定義に「住民が住み慣れた場所で安心して死を迎えることが出来るように支えること」を加えた。講演会や座談会で「“死”をタブー視しない」活動を実践した。その一つとして「太郎さん物語」というお芝居を平成23年から継続している。脳梗塞になった太郎さんの入院から自宅での看取りまでを通じて、医療や介護や死について話題を提供した。また前日ビデオで見せていただいた「太郎さん物語・完結編」では、天国に逝った太郎さんをはじめ、あの世では皆が元気で暮らしており、この世で過ごす妻の花子さんを気遣い、地上を覗くと花子さんにがんが発見される。しかし周囲の人々に支えられて生きているという内容であった。

どの会も多くの住民が参加し大盛況であった。お芝居を見た後のアンケートでは「死について関心が高まった」「自宅で最期を迎えたい人が増えた」などであった。「死の準備教育」を行う上でこうしたお芝居はよいツールであったとのことであった。死を考え



写真30 赤木重典国診協副会長による助言

ることから生きていく上でできるだけ健康で長生きをするため、地域包括ケアの中で予防を重視し、そのためにも「梶原病院でよかった」と言ってもらえる病院づくり、町づくりを目指して行きたいとのことであった。

その後、会場から質疑応答があり、矢野町長へは町づくりの財源の問題や病院経営について質問が投げかけられ、国や県の担当者を顔の見える関係をつくり、その中で補助金を獲得していったとのことであった。また、池田院長にはがん治療や三次救急への対応について質問があった。内田前院長には「死の準備教育」の効果や施設の看取りについて質問があった。

最後に赤木重典国診協副会長（写真30）から助言があり、梶原町では行政と病院が強い連携を持ち、少ない地域資源を活かしながら「生きる仕組み」をつくり出していることは、地域包括医療・ケアの一つの花が咲いたようだと言った。限られた人材と社会資源の中でこうしたシステムをつくり上げたことは他の中山間地区でも大いに見習うことであり、国の地域医療構想の中で梶原町のような取り組みが正しく評価されるべきだと述べた。

そして美しい千枚田など豊かな自然環境のなか、今回の地域医療現地研究会ができたことに感謝して助言の言葉とした。

#### [閉講式]

次期開催地の福井県おおい町国保名田庄診療所の



写真31 中村伸一名田庄診療所長による次期開催挨拶

中村伸一所長（写真31）から次期開催の挨拶があった。皆さんご存知のように中村先生は地域で住民の健康から死まで見つめ地域包括医療・ケアを行っている医師で、福井県やおおい町のことを楽しく紹介していただいた。参加者はまた来年、おおい町で開催される現地研究会を今から楽しみにすることができたプレゼンテーションであった。



写真32 押淵徹国診協副会長による閉会挨拶

最後に押淵徹国診協副会長（写真32）から開催地への謝辞と全体のまとめとして閉会の挨拶があり、第30回現地研究会の2日間にわたる全日程が終了した。

参加者は高知駅へ向かうバスと高知空港へ向かうバスに分乘し帰路に立ったが、その際多くの梶原町や高知県国保連合会の方々に見送っていただき、2日間の現地研究会が本当に心温まるものになった。

製薬会社は、  
幸せな未来を  
描けているだろうか？

MSDは、医薬品やワクチンの提供を通じて、日本の、そして世界の医療ニーズにお応えしています。そこで思い描いているのは、皆さまのすこやかな未来。薬の力を未来の力につなげるために。これからもMSDは、時代を切りひらく革新性と科学への揺るぎない信念で、画期的な新薬やワクチンの開発に取り組んでいきます。

新薬で、未来をひらく。



MSD株式会社 東京都千代田区九段北一丁目13番12号 北の丸スクエア [www.msd.co.jp](http://www.msd.co.jp)